

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

序論

国立民族学博物館を活用した異文化理解教育のプログラム開発：学びのメディアとしての民博の可能性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森茂, 岳雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001639

序論 国立民族学博物館を活用した異文化理解教育のプログラム開発

— 学びのメディアとしての民博の可能性 —

森茂 岳雄

中央大学文学部

国立民族学博物館先端人類科学研究部客員研究部門

- | | |
|-----------------------------------|-------------------------|
| 1 学校教育と博物館 | プログラムの開発と実践 |
| 2 博物連携のさまざまな取り組み | 5 アウトリーチ教材の開発・実践と展望 |
| 3 国立民族学博物館における教育への取り組みと本プロジェクトの課題 | 6 博物館を活用した学びの環境と方法のデザイン |
| 4 民博のメディア環境を活用した学習プロ | |

*キーワード：博物連携，メディアとしての博物館，異文化理解教育，学習プログラム開発，学びのデザイン

1 学校教育と博物館

2002年度からの新指導要領による「総合的学習の時間」と「完全学校週五日制」の開始の中，これまで学校に閉じこめられがちであった学びの場を「ひろげ」，「つなげ」ていくメディアとしての博物館の意義と可能性が認識され，現在学校と博物館の連携がさまざまな形で進められてきている。

新設された「総合的学習の時間」においては，総合的な学習の時間を行うに当たって配慮する事項の一つとして，「学校図書館の活用，他の学校との連携，公民館，図書館，博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携，地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること」（小・中・高等学校の学習指導要領（2003年一部改正）「総則」，以下下線引用者）が明記された。

特に，総合的な学習の時間においては，その学習課題の一つとして情報，環境，福祉・健康等と並んで「国際理解」があげられ，現在学校現場において様々な取り組みがなされてきている。

また教科においても，小・中学校の社会科において学習指導要領の中で博物館の活用が明示されている。すなわち小学校社会科においては，学習指導要領の「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱い」の1(3)において，「博物館や郷土資料館等の活用を図るとともに，身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を行うようにすること」（下線部引用者）と述べられ，具体的には『小学校学習指導要領解説・社会編』の次の箇所において博物館の活用について言及された。（表1）

表1. 小学校学習指導要領解説（社会編）にみる博物館の活用に関する記述

学年	内 容（下線部引用者）
3・4年	(1)ア「主な公共施設などの場所と働き」の「取り上げる施設」の中に「美術館」があげられた。
	(5)「地域の人々の生活の移り変わりについての学習では、博物館や郷土資料館などを見学したり、古くからの道具などを観察、調査したりすることができる。」
	(5)ウ「例えば、博物館や郷土資料館などを訪ね、当日使われていた道具を調べたり、実際に触れたり使ったりしながら、先人の工夫や努力、当時の人々の生活の様子などを具体的に調べることができるようにすることが大切である。」
6年	(5)「地域の博物館や郷土資料館を利用して文化遺産について学芸員の話の聞いたり、さらに身近な地域に残る遺跡や文化財などを訪ねて調べたりすることは、歴史的な事象を具体的に理解する上で有効な学習である。」
	(1)ク「学校図書館や公共図書館、博物館や郷土資料館などを活用したり、地域の高齢者に話を聞いたりするなどの活動を取り入れ、児童が自ら資料を活用したり、地域の高齢者に話を聞いたりするなどの活動を取り入れ、…（後略）。」

このように、具体的に言及されているのは、特に3・4学年の地域学習と6年の歴史学習であるが、指導計画の作成においては各学年において全体として配慮されるものである。

また、中学校社会科においては、「内容の取扱い」の(1)オで「日本人の生活や生活に根ざした文化については、…（中略）…民俗学などの成果の活用や博物館、郷土資料館などの見学・調査を通じて、生活文化の展開を具体的に学ぶことができるようにすること。」と述べられ、(2)イでは内容の(1)イ（身近な地域の歴史を調べる活動）に関して、「…博物館、郷土資料館等の活用も考慮すること。」と述べられた。

このように、今日学校教育と博物館の連携が求められる中、世界の民族やその文化にかかわる学びの場としての、また学びのリソースセンターとしての国立民族学博物館の役割は大きくなってきている。

2 博学連携のさまざまな取り組み

2002年度版の『社会教育調査報告書』（文部科学省）によれば、我が国には博物館法の規定にある登録博物館及び博物館相当施設が1120館、登録や認定申請していないが同種の事業を行っている博物館類似施設が4243館で、合計5363館の博物館が存在する。これらの博物館の多くでは、近年の学校における博物館活用のニーズに対応して、旧来の資料の収集、保存、展示、研究といった活動に加え、教育支援活動にも積極的に取り組んできている。¹⁾ 例えば、学校の博物館活用のための「利用の手引き」、「利用事例集」や「博物館学習指導資料」の作成、展示資料に関連する設問や解説を掲載した「学

習ノート」「ワークシート」などの編集等である。

博物館の有する最大のメディアは展示であるが、この展示を学校の教育活動において有効に活用するためにはその教育利用の可能性を、指導する教師に知らせることが重要である。教師にそれについての認識がないと、学校の学習活動に博物館を積極的に位置づけることはできないし、たとえせっかく子どもたちを博物館に連れて来たとしても子どもに有意義な活動を提供できない。

そこで、博物館の展示が学習指導要領に示されたどの学年のどの教科内容と対応し、その展示やコーナーを活用してどのような活動ができるかを教師に知らせることは大切である。そのような必要から、先駆的事例としては、福島県立博物館が学校のカリキュラムと博物館資料の対応一覧表、展示資料の解説、博物館資料を使った指導の展開例(学習指導案)を含む『博物館学習指導の手引き』(小学校編, 1989年, 及び中学校編, 1990年)を作成している。最近では、横浜のJICA海外移住資料館が、展示及び博物館資料を活用した授業案例、同資料館で使用できる教材、児童・生徒が読める日系移民に関する図書載せた『学習活動の手引き』(2005年)を作成して横浜市の全小・中・高等学校に配付し同館の教育利用可能性を図るとともに、さまざまな学習活動に使える日系移民をテーマとした「紙芝居」(4種類)や「カルタ」を作成し、学習活動に役立っている。また兵庫県立人と自然の博物館では、同様に小・中・高等学校における「教科・単元と展示資料関連早見表」(『団体利用の手引き』所収)を作成し、近隣の学校に配付するとともに、同館を訪れる学校の利用に役立っている。

小学校3年生の学習指導要領の内容「人々の生活の移り変わり」に対応して企画展を行っている博物館も多い。例えば、群馬県立歴史博物館では、1997年以来、毎年この単元を扱う3学期に「子どものための特別展示：むかしのくらしーおじいさん、おばあさんの子どものころー」を開催している。

博物館学習は時間的、経済的困難を伴う場合も多い。そこで直接博物館に行けない子どもたちのために、学校の教室に博物館が用意した資料などを運んで展示し、子どもたちが実際の資料に触れて、体験的学習の場を設ける「移動博物館」、博物館が学芸員などの職員を学校に派遣し、博物館資料などを用いて行う「出前授業」も行われている。また、博物館の「学習施設」をそのまま学校に運んできて学習活動を行うという試みもなされている。例えば、四日市市立博物館の移動天文車「さらら号」、のとじま臨海公園水族館の「ふれあい移動水族館(車)」、高知県立美術館の「移動ハイビジョン・シアター」など4トンとラックを改造した専用学習施設が市内・県内の学校を巡回して博学連携の試みを支えている。

いくつかの博物館ではテーマに従ってさまざまなモノを集めて、その解説や使い方のガイド、それを用いた授業案例等をトランク等にバックした「アウトリーチ教材」の開発が行われている。例えば、旭川市立博物館では、縄文時代の衣服、実際に出土した黒

曜石のナイフ、複製品の土器、火おこしの道具など30点を強化プラスチックの製の縄文土器型容器に収めた「縄文体験キット」を開発している。今日このようなアウトリーチ教材を作成する博物館は増えてきている。

また、近年の博学連携のユニークな試みとして、次のような試みもなされてきている。

第一は、子どもが学芸員の仕事を実際に体験するジュニア・スタッフの活動や博物館における職場体験学習（インターンシップ）である。神戸市立博物館では、2000年にジュニア特別展「復元！縄文土器」を行った。市内の小中学生による「ジュニア学芸員」が、遺跡の現地調査、縄文土器の制作、展示資料・パネル原稿の作成までを行った。また、学校の空き教室等を利用して博物館づくりを行う実践も増えてきている。

第二は、TV会議システムを使った遠隔授業の試みである。兵庫県立人と自然の博物館では、2000年からパソコンを使ったテレビ会議システムを学校へ送信し、教室にいる子どもたちからの質問を受ける双方向型の学習システムを確立している。複数の学校と同時に遠隔授業を行うことで、学校間の交流や競争が芽生え、学習意欲の高まりも期待できるとしている。

第三に、「セカンドスクール」としての博物館の利用である。例えば、秋田県教育委員会は、1999年度から3年間「教育施設のセカンドスクールの利用推進事業」を行った。この事業では、県立博物館・美術館などの教育施設での教室を離れた体験学習を進め、その学習時間を教科の時間として扱うというシステムである。学校側には博物館などの教育施設を教育課程に位置づけることが求められ、教育施設側には各施設の特徴を最大限に生かして、教科に位置づけた学習ができるよう、学習資料などの整備充実に努めることが求められた。このような取り組みはアメリカなどで始められているミュージアム・スクール²⁾の発想を日本に生かしたものと見える。今や博物館は「第二の学校」にもなっている。

第四に、博物館の学校利用をより効果的に促進する上で重要なのが、指導者である教員自身の博物館体験である。そこで博物館の資料や展示を教員に理解してもらうさまざまな試みが開始されている。和歌山県立紀伊風土記の丘には、1999年に「ティーチャーズルーム」が開設された。社会科見学で風土記の丘を利用する際の課題作成や体験を重視した効果的な見学方法のアドバイス、勾玉・土笛・埴輪の製作や古代塩作りの体験などの実習を中心に、学芸員が教員の相談に応じている。現在建設中の山梨県立博物館においても博物館職員と教員との交流の拠点として「ティーチャーズ・センター」の設置を計画している。

このように、現在、学校と博物館の連携はさまざまな角度からで進展してきている。（博学連携と博物館教育の今日的課題について、本報告書において、「近代学校の問題点を越えて」という視点から小笠原喜康によって論じられている。）

3 国立民族学博物館における教育への取り組みと本プロジェクトの課題

研究博物館としての民博においても、従来からの資料の収集、保存、展示、研究といった活動に加え、近年教育活動に積極的に取り組んできている。ここ5～6年の間に民博が行ってきた主な教育実践・研究活動としては次のようなものがあげられる。

- ①学校の休暇時を利用したり、特別展と連携したワークショップの開催（国立民族学博物館民族学開発センター編，2000-a）
- ②ワークブック「民博子ども探検」や「みんぱく子どもガイド」「トピックシート」等，学校団体利用のためのガイドの開発（国立民族学博物館民族学開発センター編，2000-b，2001）
- ③学校と連携した学習プログラムの開発と実践（国立民族学博物館博物館運営委員会・博物館交流事業委員会合同学習支援ワーキンググループ編，2003）
- ④アウトリーチ教材「みんぱく」の開発と運用（国立民族学博物館民族学開発センター編，2000-c）
- ⑤民博の教育利用の現状や貸出し学習キット「みんぱく」の利用意向等についての調査の実施（国立民族学博物館民族学開発センター編，2000-c）
- ⑥博物館教育に関する国際シンポジウムの開催（国立民族学博物館民族学開発センター編，2003）

以上の他、近隣の学校からの要望によって民博を生徒の職場体験の場として提供する試みや、教育委員会や学校関係者に働きかけて民博活用のための教師研修プログラムの実施なども行っている。最近では、館内の研究者が協力して異文化理解のための総合学習用の子ども向け参考図書（石毛監修 2004-a，2004-b）が編集された。

これらこれまでの民博における教育実践・研究活動の成果をふまえ、本プロジェクトでは以下の三点を主な課題とした。

- ①展示を含む民博のメディア環境を活用した小・中・高等学校の異文化理解教育の学習プログラムを開発し、実践する。
- ②民博のアウトリーチ教材「みんぱく」の教育的意義と展望を他のアウトリーチ教材の比較検討を通して明らかにするとともに、新しいアウトリーチ・プログラムの提案を行う。
- ③博物館を活用した新しい学びの環境と方法のデザインを理論化する。

以下、それらの課題に向けての共同研究会の取り組みとその成果について述べる。

4 民博のメディア環境を活用した学習プログラムの開発と実践

過去において、ロサンゼルスのみ全米日系人博物館の巡回展示「弁当からミックスプレートへ—多文化社会ハワイの日系アメリカ人—」が2001年に民博エントランス・ホールで開催された際、民博の学習支援室のサポートを受けて、本プロジェクトの共同研究員の中山京子と森茂岳雄を中心に近隣の中学校や和歌山県の中・高生のグループを対象にした学習プログラムの開発と実践を行った（森茂・中山・吉荒 2002: 59-139）。しかし、これまで民博の常設展示を中心に、学校と連携したり、他の民博のメディア環境を活用した学習プログラムの開発、実践は行われてこなかった。

そこで本プロジェクトでは、常設展を中心に、展示資料以外の収蔵品、映像、音声テープ、図書資料、みんぱく等の民博のメディア環境を活用した異文化理解教育の学習プログラムの開発・実践を中心課題に据えた。共同研究会では、民博の展示作成者と学習プログラムを開発・実践する現場教員のディスカッションを通して、多くの博学連携の実践が重ねられてきた。

本報告書では、小学校と連携した実践として、①図画工作科の「仮面づくり」に民博見学を取り入れ、展示されている仮面を教室に持ち込んで鑑賞し、各自が自分の仮面づくりに取り組んだ八代健志、佐藤優香の実践、②民博の楽器展示を活用して音楽科の授業づくりを行った居城勝彦の実践構想及び「みんぱく ソウルスタイル」を使って行なわれた国際理解教育の実践、③同じく図画工作科で民博のホームページからダウンロードしたオセアニア展示「砂絵シンボル」を用いて砂絵づくりに挑戦した中山京子の実践について報告した。

中学校と連携した実践としては、①技術・家庭科において「人・モノ・コトとの相互啓発」をキーワードに、民博のハンズ・オン・コーナー「ものの広場」（2005年1月閉鎖）を使って、「材料教育」という視点から分析し、それに基づいた学習プログラムの開発と実践を提案した今田晃一論文、②同じく「ものの広場」の見学を通して、それに学んで学校の文化祭で「ミニ博物館」づくりに挑戦した木村慶太の実践、③特別展と連携して学校のクラブ活動における民博活用の可能性を考えた織田雪江の実践を報告した。

高等学校においては、①ハワイへの修学旅行の事前学習としてリニューアルされた民博のオセアニア展示の「先住民の文化運動」や「ハレクーアイ」のお土産物屋を活用した柴田元実践、②世界史で近代世界の構造を理解する上で大切な「大航海時代」以降のヒトの移動とモノの交流の学習にアメリカ展示を活用した田尻信壺の実践について報告される。

さらに、民博展示のより広範な教育活用の可能性を考えるために、中山京子によってさまざまな展示を活用した10の授業構想の事例が示された。これらの多くはまだ構想段

階のものであるが、今後これらの授業案を参考に実践、修正が行われることを期待したい。

博学連携の学習プログラムづくりにおいては、民博の展示を設計した専門分野の研究者及び民博の学習支援体制と現場教師の三者の連携をどう計るかが今後の課題である。

5 アウトリーチ教材の開発・実践と展望

民博の教育活用といっても、全国すべての学校が民博を直接利用できるものではない。物理的、経済的理由から民博を訪れられない子どもたちの方が圧倒的に多い。これは全国の博物館に共通の現実である。そのため内外のいくつかの博物館では、テーマに従って、学習活動の際に子どもが触れてもよいさまざまなモノを集めて、その解説や使い方のガイド、それをういた指導案例等をバックにしたトランクキット型のアウトリーチ教材の開発が行われている。

民博においても、従来の標本貸し出し事業に代わる学校向けの貸し出し学習キット「みんぱっく」が開発され、2000年4月から民族学研究開発センターで開発と実験的運用が行われて来た。そして2002年9月からは民博の普及事業に正式に位置づけられ、貸し出しが開始された。現在貸し出し用として承認されたものは、「極北を生きる—カナダ・イヌイットのアノラックとダッフルコート—」「アンデスの玉手箱—ペルー南高地の祭り与生活—」「ジャワ文化をまとう—サルンとカイン—」「イスラム教とアラブ世界の暮らし」「ブータンの学校生活」「ソウルスタイル—子どもの一日—」の6バックである。これらの「みんぱっく」の開発と運用については、早速に調査報告書が出された。今後これらの調査をもとに、教材としてより洗練された「みんぱっく」への改修と新しい「みんぱっく」の開発が求められている。

そこで本プロジェクトでは、教材キットとしての「みんぱっく」の教育的意義を他のアウトリーチ教材と比較することによって明らかにするとともに、現場利用の諸課題を検証することを一つの柱としている。

本報告書では、これまで「みんぱっく」の開発に中心的に携わってきた佐藤優香によって「みんぱっく」の開発経緯や「かかわり」のツールとしての「みんぱっく」の意味やそれをういた実践、及びその展望について報告した。

今日このような国際理解（異文化理解）のためのアウトリーチ教材開発の試みは、博物館を越えて、NGO/NPO、民間研究団体、大学等さまざまな機関・団体によって行われてきている。本プロジェクトでは、「みんぱっく」他に、いくつかの機関、団体によって作成されたアウトリーチ教材の開発とその運用、それを活用した授業実践について検討を行い、博学連携におけるアウトリーチ教材の意義と課題について検討された。

大学によって開発・運営されているアウトリーチ教材としては、桜美林大学の草の根

国際理解教育プロジェクトが開発した「異文化発見キット」がある。本書では、その開発に当たった高橋順一によって、「異文化発見キット」の開発・運用の紹介をふまえて民博のアウトリーチ・プログラムが今後めざすべき方向性が検討され、新しい事業形態が提案された。もう一つ研究団体によって開発されたキットとして「博物館をトランクに」をコンセプトに多文化社会米国理解教育研究会（代表：森茂岳雄）が開発した多文化社会米国理解のためのトランクキット教材「マルカル・トランク」がある。本書では、その開発に当たった森茂岳雄と中山京子によって、その基本的考え方とそれを用いて行われた実践の検討を通して、博学連携におけるトランクキット教材の意義と可能性について論じた。

6 博物館を活用した学びの環境と方法のデザイン

教育メディアとしての博物館は単に学習の素材を提供するだけの場所ではない。博物館は子どもたちに学校とは異なる新しい学びの環境と方法を提供してくれる。これは博物館の役割についての近年の意識やその根底にある知識観の変化に関係している。すなわち、伝統的に博物館は人々を啓蒙するための普遍的なモデルや審美基準を提供する「神殿」とされ、そこにおいて展示は制度化された人間の知の体系として君臨して来た。しかし近年、博物館を意見対立、実験、討論、ワークショップ等の場とみなす「フォーラムとしての博物館」（吉田 1999：212-235）という考え方が出現してきている。そこにおいて知識は、環境との関わりの中でリアルタイムに生成され、再構成されるもの、つまり「反表象主義」、「社会的構成主義」の知識観である。

このような視点に立って、本プロジェクトでは「フォーラムとしての博物館」による新しい学びの創造可能性について探った。本書では、①小笠原喜康によって、反象徴主義の知識観に立った博物館展示と博物館教育のあり方について論じられた。また、②上田信行によって、前述した「仮面をつくろう」の実践報告を受けて、「創作、編集、発表」型ワークショップによる新しい参加一体験型の学習デザインや「ネオ・ミュージアムと学びの社会的構成」「経験のパブリッシング」という新しい学びの場のデザインの考え方が提案された。

このようなフォーラムとしての博物館が提起する知識観、学習観は、学校における従来の知識教授といった伝統的な学習観を克服する新しい視点と方法を提供してくれる。その意味で、博学連携はさまざまな意義と可能性を持っている。

註

- 1) 近年の博学連携の具体的取り組みについては、「総合学習とミュージアム—丹青研究所レポート(1)~(2)—」『教育新聞』2001年~2002年、参照。
- 2) 例えば、米国ニューヨーク市にある「ニューヨーシティ・ミュージアム・スクール」では、コミュニティスクールと複数の博物館・美術館が連携協力して運営されている。連携している博物館は、アメリカ自然史博物館、ブルックリン美術館、マンハッタン子ども博物館、ユダヤ博物館などで、これらが持っている広範な資料と人的資源を活用して統合的で学際的な学びが展開されている。子どもたちは、週の内二日はミュージアムスクールの本拠地である学習センターで基礎的な教科として科学や数学、文学等の授業を受け、あと三日は担任の教師とともに博物館に「登校」してモジュール学習（テーマ学習）を行う。（「ミュージアムスクール」『教育新聞』2001年4月12日、参照。）

文献

- 石毛直道監修，朝倉敏夫・阿良田麻里子編
 2004-a 『くらべてみよう！日本と世界の食べ物と文化』講談社。
- 石毛直道監修，小長谷有紀編
 2004-b 『くらべてみよう！日本と世界のくらしと遊び』講談社。
- 国立民族学博物館民族学開発センター編
 2000-a 『冬休みイベント報告書』
 2000-b 『学校団体利用のためのガイド開発』
 2000-c 『民博学習キット（仮称）と総合学習における国立民族学博物館の活用の可能性について』
 2001 『学校教育における博物館の利用方法をめぐって』
 2003 『国立民族学博物館博物館教育国際シンポジウム「自由な学びを支援するには—英米の博物館事例を探る—」講演記録・論文集』
- 国立民族学博物館博物館運営委員会・博物館交流事業委員会合同学習支援ワーキンググループ編
 2003 『平成14年度 学習キット「みんなぱっく」に関する運用報告』
- 森茂岳雄・中山京子・吉荒佳枝
 2002 「学習プログラムの開発と実践」中牧編 後掲書 pp.59-139。
- 中牧弘允編
 2002 『日米共催の展示における学習プログラムとボランティア活動』国立民族学博物館調査報告26。
- 小笠原喜康
 2001 「"Hands On考":知識はどこにあるのか—「反表象主義」の知識観と博物館展示」チルドレンズ・ミュージアム研究会編『子ども博物館楽校』No.2。
- 吉田憲司
 1999 『文化の「発見」—驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで—』岩波書店。

